



PHOTOGRAPHER  
HIDEHIRO  
OTAKE

1975年京都府生まれ。一橋大学社会学部卒。1999年から北米「ノースウッズ」で人と自然の関係をテーマに撮影を続けている。主な写真絵本に『ノースウッズの森で』『もりはみている』(福音館書店)など。2018年、日経ナショナルジオグラフィック写真賞でネイチャーデ部分最優秀賞受賞。ノンフィクション『そして、ぼくは旅に出た。はじまりの森ノースウッズ』(あすなろ書房)で第七回梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞。2021年、写真集『ノースウッズ—生命を与える大地—』(クレヴィス)で第40回土門拳賞を受賞。2023年、NHKBS「ワイルドライフ」に出演。写真展や講演なども多数行なっている。



撮影協力「本とごはん ある日」(岐阜県恵那市)

写真家

# 大竹英洋

HIDEHIRO OTAKE

## 写真の限界を超えて 体験した自然をそのまま伝えたい。

**学生時代に見た「夢」が、  
写真家としての原点に**

**編** 大竹さんが写真家を志すまでには、どのような原体験があったのでしょうか。

**大竹** 実は、子どもの頃はクリエイターとはほど遠い存在だったんです。自分を表現することが苦手で、思い返すと不思議なくらい引っ越し思案でした。そんな自分が大学に入って、「それまでとはまったく違う世界を見てみたい」と思うようになったんです。大学ではワンダーフォーゲル部に入ったのですが、それまで山登りをしたことがなかった僕にとって、自然の中で過ごすこと自体が、まったく新しい世界でした。都会での便利な暮らしの中では見えなかつたものが、自然には確かにあったのです。

**編** その体験が、「自然を伝えたい」という思いにつながつ

ていくんですね。

**大竹** はい。ただそのころの僕は、写真にはまったく縁がありませんでした。転機になったのは、写真家・星野道夫さんの訃報を知ったことです。それが大学2年の夏でした。「写真家ってどんな仕事なんだろう」と興味が湧き、そのまま本屋に行って、星野さんの写真集を開いた瞬間、衝撃を受けました。光が見える。風が吹いてくる。ページをめくっただけで極北の空気が伝わってくるような臨場感に、完全に打ちのめされました。そこで初めて「僕のやりたいのは写真だ!」と思ったんです。

**編** 「撮りたいもの」も具体的に浮かんできたのですか?

**大竹** いえ、野生動物が暮らす広大な自然を撮りたいという漠然とした思いはあったんですが、最初は何をテーマにすればいいのか、迷っていました。ただ、あるとき、夢の中にオオカミが出てきたんです。うっすらと雪が積もる森

の中に、一頭のオオカミが現れて、こちらに鋭い視線を投げかけてから、さっと森の中へ走り去っていった。普段、僕はほとんど夢を覚えていないのですが、このときは、目が覚めた後も、その悠然とした、どこか崇高なオオカミの姿が頭から離れませんでした。それで、図書館に行ってオオカミのことを調べていると、アメリカの写真家ジム・ブランデンバーグの写真集に出会いました。その写真集を見て、「オオカミをこの目で見たい、撮りたい」と思うようになったのです。

**編** オオカミの夢が、写真家としての道を歩み始めるきっかけになった。

**大竹** はい。そして大学卒業後、ジムさんのオオカミの写真が撮影されたミネソタ州北部を訪ねたのが、僕と北米のノースウッズとの最初の出会いでした。

## 自然、動物たち、旅とキャンプ、そして人々に惹かれて

**編** それ以来、長年にわたりノースウッズの撮影を続けてこられたわけですが、その魅力はどんなところにあるのでしょうか？

**大竹** 「自然」「動物」「旅」「人」といった要素が挙げられると思います。まず「自然」ですが、北国の自然はとても繊細なバランスの中にあります。一年の半分が冬という厳しい環境で、植物が一気に繁茂するような力強さはありません

ん。でもその代わりに、空気が張りつめるような、凜とした美しさがある。「北国だからこそその自然」に強く惹かれるんですよね。

そして、そこに暮らす「動物」。あの環境で強く生きている動物たちの姿には、心を打たれるものがあります。もちろん他の地域の動物たちも魅力的ですが、北国の厳しい寒さの中で生きる姿は、本当に輝いて見えます。

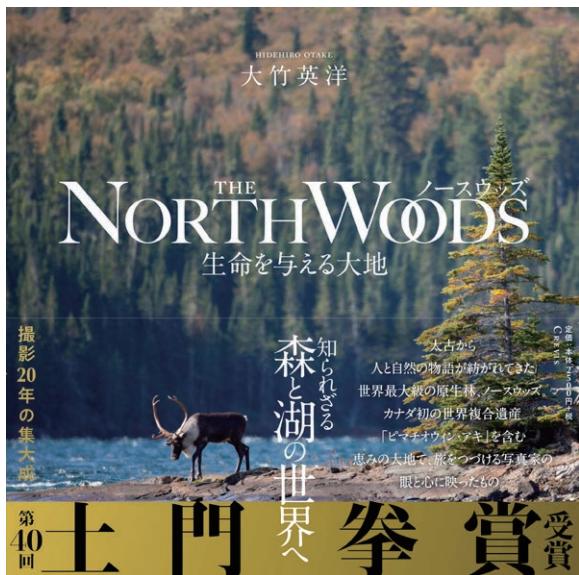
また、この地を旅することそのものも、非常に魅力的な体験です。僕は大学のワンドーフォーゲル部で沢登りを始め、焚き火や釣りを通して自然が好きになりました。ノースウッズでも、野営をしながら、カヌーで旅をしています。写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地』にも、キャンプ風景の写真をたくさん収めています。

そして「人」。あの厳しい自然の中で生きる人たちの姿や、狩猟採集の暮らしを続けてきた先住民の文化、自然観。そうしたものを抜きにして、この世界は語れないと思います。北国の自然、動物たち、旅とキャンプ、そして人々。それらの魅力を追い求めるうちに、20年以上が過ぎていきました。

## 撮る前に、自然を五感で「体験」する

**編** こうした大自然の中で撮影をする際に、意識していることはありますか？

**大竹** 「体験すること」を何より大切にしています。自分が



THE NORTHWOODS —生命を与える大地—  
(クレヴィス)

北米ノースウッズの森と湖で20年にわたり撮影を続けてきた集大成としてまとめられた写真集。大自然の中で繰り広げられる生命の営みを写し出した。第40回土門拳賞受賞。



世界最大級の原生林が残るノースウッズ

写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地』より

針葉樹の原生林が地平線まで続き、無数の湖が点在する「ノースウッズ」。日本の8倍に及ぶ広大な大地に、太古の自然がそのまま残されている。



その場に行き、立ち、自然の中で何が起きているのかを知りたい。そのためにカメラを持っていく、という順番です。春の匂いや、湿った土の気配。そうしたものを感じないままシャッターを切っても、意味がないと思っています。まず自然そのものを五感で体験する。そのうえで写真を撮る、という順番を大切にしています。

**編** だからこそ、写真を見る人に伝わるものがあるのですね。

**大竹** 写真は、動きも音も匂いも写らない、限界の多いメディアです。でも、その写真を見たときに、風を感じたり、音が聞こえる気がしたり、「おいしそうだな」と感じてもらえるなら、それは素晴らしい写真だと思います。僕は、そんな“写真の限界”を超えるような一枚を撮りたいんです。そのために、長いときは1ヶ月ほどキャンプに入りっぱなしで撮影することがあります。時間をかけて自然の中に身を置くことでしか見えないものがある。それが写るかどうかはわかりませんが、自然を体験し、写らないものを感じることはとても大切だと思っています。

僕は自然の中で撮影するとき、いつも「厳かな場所」へ向かう気持ちで入っていきます。自分は外から来た存在なので、動物たちの暮らしを「見せていただく」つもりで、そのそばに身を置く。「撮らせてよ」という気持ちが前に出ると、動物たちはすぐに離れてしまいます。

## 予期せぬ出会いを求めて森を歩く

**編** 撮影のテーマ設定は、あらかじめ決めてから行かれますか？

**大竹** ざっくりとは決めて行きます。「今年は春を撮ろう」

「今回は冬の雪を撮ろう」といった大まかなテーマを立てて、その時期に合わせて滞在します。ただ、現地では、事前の情報より、旅の途中で人から聞く話の方が重要なことが多いですね。

**編** あらかじめ撮るものを見つめすぎない、ということでしょうか。

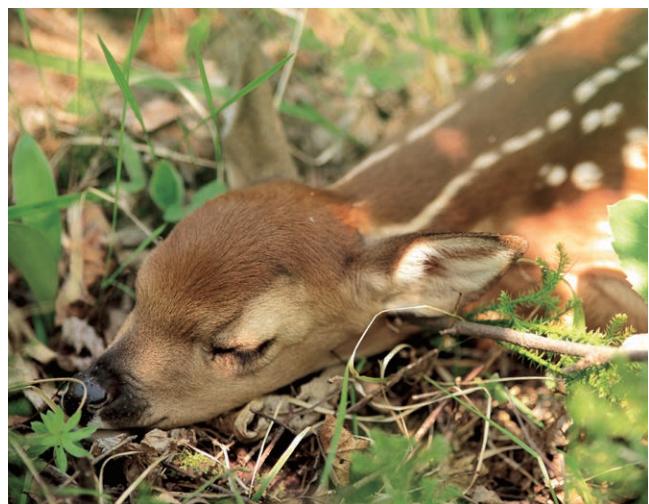
**大竹** そうです。最初から構図まで決めて撮りに行くことはほとんどありません。そのとき、その場で、自分が心が動いたものを撮ります。いつも「予期せぬ出会い」を求めています。たとえば、通い始めたばかりの2000年頃のことですが、6月の昼下がりに森の中を歩いていました。いまなら、その時期、その時間帯に歩くことはほとんどありません。夏の始まりは草木が青々と茂り、食べ物も豊富で、気温の高い日中は動物に会える確率が低いからです。でも当時は、そんなこともわからず、獣道をふらふら歩いていました。そのとき、子鹿を踏んでしまいそうになったんですよ。写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地』にも出てくる、「フリーズ」している子鹿です。

**編** 地面にじっと横たわっている写真ですね。

**大竹** そうです。そのときは「ケガをしているのかな？」と思いました。動物が天敵から身を守るために、身を伏せたまま動かなくなる「フリーズ」という行動を、当時は知らなかつたんです。

**編** そうやって厳しい自然を生き抜いているんですね。

**大竹** いまの僕は森や動物の知識を得て、ある程度「わ



気配を消して、危険から身を守る子鹿

写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地』より

危険を感じると身を伏せて気配を消し、静かにやり過ごそうとする、生まれたばかりの子鹿。かわいらしい姿の奥に、必死に生きていこうとする野生の力が息づいている。

かったつもり」になっています。でも、そのせいで見えなくなっているものがあるかもしれない。この写真を見るたびに、そんなことを戒めのようになります。

## 夢に現れたオオカミを追い続ける

**編** 大竹さんにとって「オオカミを撮る」ことは、いまも大きなテーマなのでしょうか。

**大竹** はい。それこそ終わりがないテーマだなと感じています。ノースウッズに通い始めて25年になりますが、野生のオオカミと自然の中で出会えたのは、20回くらいだと思います。

**編** 25年で20回。かなり貴重な出会いですね。

**大竹** しかも、そのうちの半分は「一瞬で終わる出会い」です。こちらがカメラを構える間もなく、姿を見た瞬間にもう逃げている。人間の匂いを感じた時点で、サッと姿を消します。その反応の速さには、本当に驚かされます。

**編** その中で、撮影までできたのは?

**大竹** 逃げられずに撮影できたのは、おそらく10回くらいです。2018年に訪れたときには、自分でも本当に驚くようなカットが撮れました。なかなか見せてくれない彼らの「暮らしぶり」を、ほんの少しだけ見せてもらえたんです。

**編** 鹿肉を食べているオオカミの写真ですね。

**大竹** はい。すでに鹿が仕留められて、川の浅瀬に肉が残っているのを見つけたんです。「これはきっと戻ってくるな」と思いました。そこで、風下になる位置に身を隠して、ひたすら待ち続けました。すると、森の中から姿を現したんです。周りをキヨロキヨロと見渡しながら、「危険はないか」と慎重に確かめている。その様子を見て、「こんなにも警戒するんだ」とあらためて感じました。

**編** その緊張感の中で、どのタイミングでシャッターを切ったのですか。

**大竹** 僕としては「来た来た!」と撮りたい気持ちでいっぱいになりますが、シャッター音がどこまで届くのかわからない。もし気づかれたら、それで終わりかもしれない。だから彼らが肉を食べ始めるまで、じっと待ちました。鹿肉をガリガリと食べ始めた瞬間、そっと「カシャッ」とシャッターを切ってみました。逃げなかったので、「聞こえていないな」とわかって、そこから連写してきました。

**編** それは夢で見たオオカミに近いものだったのでしょうか?

**大竹** いえ、違いましたね。その写真も、僕が本当に撮りたい「オオカミのポートレート」と呼べるような一枚には届いていません。夢の中で見たオオカミは、もっと近い距離にいる存在なんです。ただ、少しずつ近づいてい



雪原を歩く一頭のオオカミ

写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地一』より

1月の厳冬期、気温マイナス40度。冬毛に包まれた一頭のオオカミが周囲を警戒しながら静かに進んでいく。

る実感はあります。これ以上近づく方法が本當にあるのかどうか、正直わかりません。人生をかけても不可能かもしれない。それでも、そこを目指し続けたいと思っています。

## ページをめくる中で ストーリーが生まれる写真集

**編** 写真集『THE NORTHWOODS 一生命を与える大地一』についてお伺いします。まず、写真集という形にはどのような魅力を感じていますか。

**大竹** 写真集は、まず「物」として手に取って、ページをめくっていく行為そのものが体験です。写真展の場合は、どこから見始めてどこで見終わるか自分で決められます。いわば「始まりも終わりもないメディア」です。それに対して写真集は、表紙があり、最初のページがあり、めくっていくうちに一つの「流れ」が生まれ、最後のページで終わる。ページをめくるペースは読み手に委ねられていますが、全体としては一つの時間軸、ストーリーができるります。

**編** その「流れ」をどうつくるかが大事になるわけですね。

**大竹** デザイナーや編集者と「ああでもない、こうでもない」と話し合いながら写真を並べ替えてきました。全部をクライマックスにしてしまうと、サビばかりが続く曲のようになってしまいます。だから、静かな部分や余白も必要なんです。

**編** 写真集全体として、どのような雰囲気を目指されたのでしょうか。

**大竹** 静かなトーンを大切にしました。北国の凜とし



た空気の中で淡々と営まれている命のリズム。その中に、時折、「はっ」とするような瞬間が差し込まれるような構成です。写真集はページ数がある分、強い写真も静かな写真も盛り込んで、“振れ幅”を持たせることができます。写真展では選ばないようなカットでも、写真集には入れられる、ということもあります。それが、写真集の一番面白いところかもしれません。写真展では「作品」として選ぶ写真が中心になりますが、写真集では、森を歩いていてふと立ち止まった瞬間のような、何気ない一枚も差し込めます。そうすることで、ページをめくる人に「森を歩いている時間」を体感してもらうのです。

## 素材としての写真をどう料理し、紙で表現するか

**編** 写真を発表する媒体は、モニター、プリント、写真集など、さまざまありますが、それぞれどのように捉えていますか。

**大竹** まず、媒体ごとに得意・不得意があると感じています。モニターで見る写真は、逆光の光や透けるような輝きがとても得意です。一方で、印刷物は反射光で見るものなので、同じ表現をそのまま再現するのは難しい部分もあるのかと思います。ただ、印刷には印刷の得意分野があります。たとえばインクジェットなら蛍光色の乗り、オフセットなら特色インキを使った表現など、単純な色再現を超えた表現ができる。その特性を理解したうえで、何を一番伝えたいのかを技術者と共有することが大事だと思っています。たとえば「この写真では、羽の透ける感じをどう表現できるか」と考えたとき、印刷ならではの工夫が必要になる場合があります。どこまで引き出せるのかは、技術者と相談しながら決めていきます。

**編** 具体的には、どのような調整をされるのでしょうか。

**大竹** 色やトーンをどう整えるかを技術者と相談しながら詰めていきます。こうした調整を通じて、写真に奥行きや立体感が生まれてきます。印刷の現場で、ほんのわずかな色の差で「被写体がグッと前に出てきた」と感じる瞬間を、これまで何度も見てきました。

**編** 紙媒体で写真を扱う場合の留意点はありますか?

**大竹** 最終的にどのように仕上げるかは、それぞれの現場の技術者の腕にかかっている部分も大きいと思っています。撮影時点のRAWデータは、いわばまだ料理されていない素材のようなものです。そのままでは味わえない。きちんと手を入れて、はじめて料理になる。

**編** その「手を入れる」加減が、難しいわけですよね。

**大竹** そうですね。写真で言えば、コントラストが塩・こしょうだとしたら、彩度は醤油やバターのような調味料。少し足すだけで印象は変わりますが、やりすぎれば素材の良さは失われてしまう。なるべくシンプルに、でもきちんと味わってもらえるところまで整える。その判断を、印刷現場の技術者と一緒にしていく感覚です。

**編** レタッチについて、「どこまでやるのか」と聞かれることが多いのではないでしょうか。

**大竹** よく聞かれますね。「嘘についていないのか」といったニュアンスを感じることもあります。もちろん事実の捏造はしませんが、写真において「本物の色」が一つに決まっているわけではありません。カメラが変われば色も変わりますし、「撮って出し」が唯一の正解でもない。

**編** では、大竹さんにとってレタッチとは、どういう作業なのでしょうか。

**大竹** 撮影時はRAWでフラットに撮っておいて、その後で塩・こしょうをふり、必要な分だけ調味料を足していく。そうやって“素材の良さを味わえる状態”に整えていくのがレタッチの役割だと思っています。

## 言葉選びにもこだわりながらつくり上げる写真絵本

**編** 子ども向けの「写真絵本」の制作にも力を入れていらっしゃいますが、その経緯や思いについてお聞かせください。

**大竹** きっかけは、『たくさんのふしぎ』シリーズを出版している福音館書店の編集者が、カフェで開いた小さな写真展を見に来てくださって、そこで「本をつくりませんか」と声をかけていただいたことです。ただ、実際に制作を始めてみると、子ども向けの本はページ数が少ない分、本当に難しい。完成した本はシンプルに見えるかもしれません、そこにたどり着くまでに何年もかかることもあります。

ます。実際、『もりはみている』も、一冊になるまで4年ほどかかりました。

**編** 写真の絞り込みや構成にも、かなり時間がかかるわけですね。

**大竹** そうですね。一枚の写真にこだわりすぎると、全体の流れがうまく回らないことがあります。思い切って外すことで、はじめて本全体の構成が見えてくることもある。ページ数が少ないだけに、一枚一枚の写真が持つ意味はとても大きいんです。

**編** 本を拝見して、言葉選びにもかなりこだわっていらっしゃるという印象を受けました。

**大竹** 絵本は、同じ一冊を何十回、何百回と読む可能性があります。だからこそ、言葉は何度読んでも耳に心地よく、飽きのこないものでなければいけない。意味だけでなく、「キヨロキヨロ」「カリカリ」といったオノマトペや繰り返しのリズムをどう配置するかを、編集者と何度も検討します。言葉そのものの音やリズムも、とても重要です。どんなテンポで場面転換していくか。どこで“転調”するか。どう終わるとどのような余韻が残るか。演劇の構成に近い感覚で、一冊の流れを組み立てていきます。

**編** まさに総合芸術ですね。

**大竹** その通りです。編集者の方も、舞台をつくるような感覚で、「ページを繰るたびの印象や、絵と言葉のバランス」



ス」を考えています。絵本の世界では、ベストセラーよりもロングセラーの方が高く評価されるのですが、それは、話題性よりも、長い時間かけて読み継がれるかどうかが大切にされているからだと思います。

## 講演も大事な「作品」の一つ

**編** 大竹さんは講演活動も積極的に行なっていらっしゃいますね。

**大竹** 実は、講演も作品だと思っています。

**編** 作品、ですか。

**大竹** はい。写真絵本も写真展も写真集も、そして講演も、すべてが作品です。ミュージシャンにとってのライブのようなものですね。本を出版しても、読んでいる人の表情までは見えませんが、講演ではそれが見えます。オオカミの姿を見た瞬間に涙を流す人がいたり、思わず声が上がったり。こうした反応を目の前で見られるのが、講演の大きな魅力です。

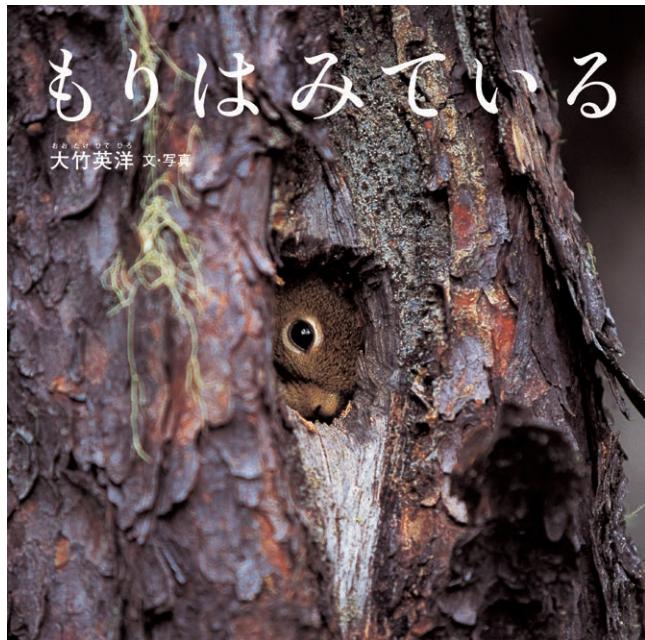
**編** 講演ではスライドショー形式で写真を映されるんですよね。

**大竹** はい。写真はすべてプロジェクターで大きく映します。会場を暗くして、一枚一枚の写真に合わせて話をします。紙芝居のような感覚ですね。

**編** ヘラジカのメスの鳴き声も、ご自身でされるとか。

**大竹** はい(笑)。秋の繁殖期に、現地のハンターから教わった方法でオスを呼ぶことができるんです。実際に、2メートル級のヘラジカが現れたこともあります。

**編** そんな体験もされているんですね!



もりはみている（福音館書店）

子ども向けの写真絵本。「動物たちに見られているのは人間の方だった」というコンセプトのもと、4年の歳月を費やしてつくられた。令和6年度児童福祉文化賞受賞。

**大竹** 講演では、写真の裏側にある物語や、現地で体得してきた技術、地元の人から教わったことも含めて伝えたい。そうやって、自分が自然をどう理解してきたのかを、まるごと届けたいんです。

## ノースウッズを軸に、少しずつ領域を広げていきたい

**編** 最後に、これから活動についてお聞かせください。

**大竹** オオカミの撮影はまだ終わっていないという思いがあります。これからも向き合い続けたい、重要なテーマです。また、ノースウッズの大きな魅力の一つである「人」についても、まだ自分の中で十分に撮れていないと感じています。最近は先住民の村に入っていて、少しずつ人々

の暮らしや文化を撮り始めています。

**編** ご自身の関心や向き合い方に、変化が出てきているのでしょうか。

**大竹** ノースウッズでの活動が終わったわけではありませんが、25年にわたり北国の森を見続けてきた自分が、別の環境に入ったらどう感じるのか、という興味が出てきました。昨年は、カナダ・ケベック州最北端のツンドラ地帯に入りました。木のない世界に立ってみて、ノースウッズとは違う厳しさや豊かさを感じ、とても刺激を受けました。これまで見てきた自然の延長線上にありながら、フィールドは少しずつ北へ広がっていく感覚があります。これからもノースウッズを軸にしつつ、新しい領域にも足を運んでいきたいと思っています。

